

清水真砂子

masako shimizu

子
も
の
本
の
ま
な
ざ
し

現代の
児童文学は
なにを問題に
しようとして
いるのか？

JIC

定価1650円
(本体1602円)

E・L・カニグズバーグ、フィリップ・ピアス、ヴァージニア・ハミルトン。これら現代の児童文学に最も重要な位置を占める作家の中に、〈現在〉が解かねばならぬ問題——たとえば、

子どもの本を
読む

清水真砂子

masako shimizu

JIC

清水真砂子 しみず・まさこ

1941年北朝鮮に生まれる。静岡大学卒業。児童文学者。青山学院女子短期大学教授。

主な著訳書に『子どもの本の現在』『家族の現在』（共著）（以上、大和書房）、『家族はどこまでゆけるか』（共著、小社刊）、アーシュラ・K・ル＝グウィン『ゲド戦記』三部作、マヤ・ヴォイチェホフスカ『夜が明けるまで』、マーガレット・マーヒー『めざめれば魔女』（以上、岩波書店）、S・E・ヒントン『アウトサイダーズ』（大和書房）などがある。

子どもの本のまなざし

1992年2月1日初版発行

清水真砂子——著者©1992

蓮見清一——発行者

JICC(ジック)出版局——発行所

東京都千代田区麹町5-5-5

郵便番号 102

郵便振替 東京7-170829(株)ジック

電話 編集部03・3234・3688 営業部03・3234・4621

信毎書籍印刷——印刷所

小泉製本——製本所

菊地信義——装幀者

乱丁・落丁本はご面倒ながら小社営業部宛ご送付下さい

送料小社負担にてお取替いたします

ISBN 4-7966-0263-1

Printed in Japan.

まえがき

かつて『子どもの本の現在』のまえがきに、気になる作家として私は四人の名まえをあげた。フィリップ・ビアス、マヤ・ヴォイチエホフスカ、E・L・カニグズバーグ、ヴァジニア・ハミルトン。もちろんほかにも何人かあった。たとえば「ゲド戦記」のアーシュラ・K・ルッグウイン。当時長篇を発表しだしたばかりのマーガレット・マーヒー。ポーラ・フォックスもまた私の好きな作家のひとつである。

いつか、これら英語圏の作家たちについても書いてみたいと思っていた。英語圏全体からすればほんのひとにぎりの作家だけれど、そして、たまたま出会えたにすぎない作家だけれど、彼女たちの仕事の何が自分をひきつけるのか。少しずつずれながら、それでも重なりあう時間を生きて、彼女たちがそれぞれの場所で本当のところ何を書こうとしているのか。それをどうしてもたしかめたくなっていた。

それに一方で児童文学の終焉が云々されるなか、児童文学を児童文学たらしめているものは何か、それをさぐりたい思いもあった。私自身は子どものためなど意識しないで児童文学を楽しんでいるが、では児童文学の児童などいらぬのかといわれれば、にわかには首をたてにふりかねる。児童ということがふさわしいかどうかは別として、あきらかに子どものために用意される文学はあり、しかも、しばしば人々の嘲笑を買うメッセージ性ゆえに生きのびている作品もあるのである。私はそんなメッセージの力をカニグズバーグの作品にさぐってみたいと思った。

私は、また、ピアスの描く子どもたちの年齢のことが、このところずっと気にかかっていた。いわゆる自我に目覚める直前の子どもたち。それより前でも後でもない子どもたち。ピアスはなぜあの年齢にこだわるのか。そこにはどんな秘密がかくされているのか。同時に壮年期の人々の描き方を自分が以前とはちがって受けとめているのにも気づいていた。

ハミルトンの文学には、たとえ読みえたのがその一部であれ、これまで私が慣れ親しんできたものとはまったく異質な、だが近しい何かを感じていた。ハミルトンの作品を読むと、私はいつもきまってる、ゆったりと何かに抱かれて、自分が解放されていくのを覚える。この作家にとって個人とは何なのだろう。私はある時、ふとそんなことが気になりだした。『子どもの本の現在』を書いて以来、私は類というものを折々考えるようになっていく。個性、個性と人々はいうが、個性にどれほどの価値があるのか、との思いが私の中に小さく、だが確実に芽生えてきている。個と類と、そのあたりのことをどう考えていけばいいのか。ハミルトンの文学にはその手がかりがひそんでいるように思われた。他の作家たちとはいえば、まだ書くようににはせっついてこない。そう、こちらが選んで書くというより、カニグズバーグたちはばたばたと私の中で騒ぎたてていたのだ、そろそろ自分たちのことを書くように、と。

作家には、走り幅跳びのように、いつも踏み切り台にもどってそこから跳ぶ人と、A点からB点へ、B点からC点へと進んでいく人があるように思われる。一冊の本でありながら、ここで三人の作家に同じ方法をとらなかったのはそのためである。

ルীগウィンのことばであつたらうか、書くことはなるほど宝探しに似ている。楽しくも恐い宝探しである。

子どもの本のまなざし

目次

まえがき..... 1

① 実用としての子どもの本..... 9

E・I・カニグスバークの世界

1 死と再生の物語..... 11

『魔女ジュニアとわたし』

2 都市の子どもの冒険物語..... 26

『クロードアの秘密』

3 「物語をこわす物語」..... 35

『ローラン・チームの作戦』

4 現実を生きるための処方箋..... 47

『ぼくと(ジョージ)』

5 もうひとつの現実..... 56

『ほんとうはひとつの話』

6 ドラゴンとは何?..... 62

『ドラゴンをさがせ』

7 作者自身にあてたメッセージ..... 77

『ジョコンダ夫人の肖像』

8 書くことの必然とは..... 95

『なぞの娘キヤロリン』

9	他者の発見・自己再確認の旅	109
	「影をおとす」	

10	無名の人の視点からアメリカを撃つ	119
	「800番への旅」	

11	帰り道の課題	137
	「エリコの丘から」	

12	おわりに	160
----	------	-----

①	否定の果ての肯定	167
	フィリップ・ピアスの世界	

1	世界の感じ方	169
---	--------	-----

2	資質とは何か	170
	ピアスとカニクスパークの比較を通して	

3	子どもは世界とどうふれてしまうか	182
---	------------------	-----

4	垂直の時間と水平の時間	190
	「垂直の時間」	

5	負のエネルギー	209
---	---------	-----

6	モラルについて	212
---	---------	-----

⑪ 類の声を聞く

ヴァジニア・ハミルトンの世界

215

1 既成のものさしでは測れない作家

217

2 “物語”に頼ることのあやうさ

221

3 現代の“夜の旅人”

234

4 止揚の精神とは何か

239

5 自分さがしの旅

252

6 語りべとしての道

271

あとがき

279

子どもの本のまなざし



実用としての 子どもの本

E・L・カニグスバーグの世界

1 死と再生の物語

『魔女ジェニファとわたし』

カニグズバーグ (Elaine Lobi Kongsburg, 1930-) の作品ほど実用的な作品はちょっとほかに見当たらない。私はカニグズバーグの諸作品を悪びれずに「実用の書」と呼びたいと思う。実用の書とは、あの、書店に並ぶ実用書の謂である。書店には実に多くの実用書が並ぶ。育児の本、料理の本、飼育の本、節税の本、財テクの本、企業経営の本、出世、支配、人間管理、コンピュータ……。カニグズバーグの本をそんな本といっしょくたにするのか、と人はいうかもしれない。そう、いっしょに考えていい。実用的である点で。現実の要請に応えうるといふ点で。いや、カニグズバーグの作品のほうがるかに本格的でさえある。書店の実用書の類はしばしば帯に短し、たすきに長し。はぐらかされることも多く、現実の要請にはさほど応えてはいないのだから。

カニグズバーグが『魔女ジェニファとわたし』(Jennifer, Hecate, Macbeth, and Me) と『クローディアの秘密』(From the Mixed-up Files of Mrs. Basil E. Frankweiler) を発表してから、今年(一九八七年)でちょうど二十年になる。もちろんカニグズバーグ自身は自分の書いた本を実用の書などと

は考えてみもしないだろうし、現実のさまざまな要請に応えようなどとは小指の先ほども思いはしなかったかもしれない。書くことに対するカニグズバーグの初期の基本的な考えは、右の自作二点でその年のニューベリー賞を争い、周知のとおり、後者で賞を獲得したときの受賞スピーチにかいま見ることが出来る。カニグズバーグはここで、書かれたことば、印刷されたことばは自分にとって生活必需品だといって、その理由を語っている。

彼女はまず、ある日、ニューヨークの街中でローリング・ストーンズが女の子たちにつかまって、「寄り集まった女の子たちの目玉のまん中で」「一かたまりの髪の毛の束のようになってサインをして」いるのを目撃したものの、それが新聞にもどこにも書かれなかったために、せっかく自分の目撃したできごともしたる現実味を持たず、ただそれだけで終わってしまったという体験を語る。カニグズバーグは、ものは書かれてこそ（あるいは描かれてこそ）さらにリアルになるといっているのである。カニグズバーグはまた、自分はたとえ、かつてジェーン・オースティンがしたように、ことばでもって、アメリカの今を記録にとりたいのだという。

そして、もうひとつ。この作家は、自分は書くことによって、書かれたものが異常でもなんでもなく、正常な、あるいは標準的なものになると信じているといい（彼女はそのスピーチで、*normal* あるいは *normal* ということばを使っている）、かつて自分には、『メアリー・ポピンズ』にしろ、『秘密の花園』にしろ、物語に描かれた家族こそが規範あるいは規準となるべきもので、描かれない自分の生活は未だ規準に達しない、規準以下のものにしか思われなかったという体験を語っている。

のちに、「なぜ子どもたちのために書くのかと聞かれると、私は通常、その人の聞きたがる答えをするようにしています」（練達の二形式——スプレッツァトゥラについて『子どもの館』七五年十月号）と書い

たカニグズバーグのことだから、このニューベリー賞受賞スピーチもまたカニグズバーグのすべてを物語っているとはいえないにしても、しかし、ここには書くことの基本的な意味がカニグズバーグのことばではつきりととらえられている。書かれなければ消えていく人、もの、こと。書かれなければ存在したことにさえならない人、もの、こと。書かれてはじめて普遍性を獲得する人、もの、こと……。カニグズバーグの生きる、今、ここ、の記録。彼女は記録することを、書くという作業を、子どものためにしたいのだという。自分の「ことば信仰」が根拠のないことかどうか証明するために。ことばの力で、ほんとうに今まで述べてきたようなことがおこるのを見せるために。

カニグズバーグはいう。自分には「三時十五分から四時まではコココーラの売り上げでもうけるより、ハーシー・チョコレートの失敬される分で損するほうが大きい、といって店を閉める」ドラッグストアの店主がノーマルには見えなかった。なぜかといえば、自分の読んできた物語ではドラッグストアの店主は「ちよっと口やかましいだけで、根は愛すべき人物なのだ」といつもかならず書かれていたからだ、と。彼女はそういう「物語」をこわそうと思った。あるいは、むしろ、そうした「物語」に拮抗する別の「物語」をうちたてようと思った。そういえるかもしれない。

カニグズバーグは、この受賞スピーチの中で同時に告白している。自分の中の母親的部分が「何かほかのことも言いたくない」と自分をせつくと。「郊外の生活がどんなふうか、描写しなさいよ。外側はとっても心地よくても内側は全然そうでないなんてことはよくあること。それがどんなにへんてこな気持ちがあるものかも話しなさいよ。でも、そのほかにももうちょっと話したら？ 話したからって、何を傷つけるわけなし。話しなさいよ、どうやったら一般の社会規範にとらわれないでいられるか。どうやったらアウトサイダーでいられるかも。それから、あなたにだっていささかのプライ

パシーの権利があることも話さないよ。でも、後生だから、そうしたことは、ごく、そつと言うこと。話しかたはチョコレート入りアイスクリームのようにね。パニラの部分をなめっていると、時折黒っぽくて味のこい、いいにおいのするものにでくわすというわけ。そのチョコレートが何かほかのことというわけよ。」そう心の中でせつつくというのである。

これが高校の化学の教師から作家へと転身（本人はそれを先祖がえりだといっているが）したカニグズバーグの、ともあれ公にした書くことへの想いであり、態度だった。そして、なるほど第一作『魔女ジュニアとわたし』から、私たちはカニグズバーグがそうした想いをすでに実行に移しているのを見ることが出来る。

この作品の舞台はニューヨークの、とあるベッドタウン。物語は一九六〇年代のある年のハロウィーンの祭りの日に始まる。その日、この町に引越してきて間がなく、まだ友だちもない「わたし」ことエリザベスは、いったん学校から帰ると巡礼の仮装をととのえ、裏道を通って、またひとり学校にむかう。ところが、途中、お気に入りの林の中で、今にも脱げおちそうな大きな巡礼ぐつをつかけたやせた足が枝からぶらさがっているのを発見。これが魔女ジュニアとの出会いである。が、そのまゝに作者の目は早くも、どこにでもある風景なのに、だれもなかなか描いてくれなかったものをとらえている。土がすりへって木の根があらわれたけわしい坂、ちゃんとした歩道よりも林の中を歩くのを好む子どもたちによって長年のあいだにつくられた怪（こゑ）がそれである。そして、また、頭をけぞらせて、青い空に木の葉がつくる模様をたのしむ少女。だから、エリザベスは枝からぶらさがる足に気づき、その足の主に気づいたのだった。